

土 淨

昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三五二号
昭和四十六年二月二十五日印刷 昭和四十六年三月一日發行



第三十七卷

第三号

1971

3

三 月 号



一 目 次

表紙「野の仏」松涛達文画

彼岸会によせて 自他を生かす道…………… (2)

特集『仏事の心得』信仰を育てるために

①仏事のあり方 宗教行事復興時代……………後 藤 真 雄………… (4)

②家庭と仏事 仏壇のまつり方と心構え……………小 俣 昌 雄………… (8)

③法要(法事)のつとめ方……………千 葉 寛 定………… (10)
親族の方(者)が亡くなった時

④寺詣り墓詣り……………安 居 香 山………… (12)

昭和法然上人伝(3) 浄土開宗・二祖対面…………… (16)

インドでの旅日記(8)……………佐 藤 治 子………… (18)

新刊紹介 藤吉慈海著「布施の行者颯田本真尼」…………大 南 竜 昇………… (24)

捧げる心……………合 田 徹 雪………… (26)

「道」 産寧坂の道……………高 橋 良 和………… (29)

法然上人の御影像をたずねて③……………佐々木 洋 之………… (32)

語和声念



彼岸

この間、ある方から、こんなお話を聞いた。先祖の追善の法要は、三つ意味がある。一つは宗教義礼として、二つには施主を中心とする身分関係、すなわち、家族、親族、知己、権力というものの上下左右のつながりを確かめあう機会として、三つにはリクリエーションとしての意味がある、と。とくに、これは、徳川期に発達したといわれる。どれを見ても現在でも、結果的には、もつともである。

第一は当然の事として、第二、第三は、目的としてはともかく、事実は否定できない。法事の案内先とか、焼香順、座席の順とかによって、その家やその人との関わりあいが見えてくる。徳川時代等の封建社会の下では重要な意味であり、ささえてあったらう。第三にしても、事実上は、年回が後になる程、集会の楽しみの方が強くなる。久々に、遠近の友人親戚の会食談笑する事は法楽である。施主にしても、それは故人に間接的にふれる機会であり、慰さみである。信仰の面からすれば不純かもしれない。

しかし、人の世にある不純の煩惱の土壌に育ったのが信仰である。こう見てくると、この第三も、なかなか味あう事だと思ふ。しかし、わたくしは、第一と第二とを統合する事になるのだが、追善法要の時は、当然、心静かに故人を思い、冥福を弥陀に請い奉るものだと思う。そして、さらに大切な事は、自分一人だけの事を思わない時だという事である。西方彼岸に在す故人先覚の回顧は、自分以外のそれらの人々の事を、しみじみと思ふ、また、その事から、自分の生命や、それを助ける多勢の関係する人々、人々とかかわり合いを確かめ、自己一人生きるのみにあらずと見、その生かされる事を感謝するよすがである。

世情、まことに忙しく、ドライである。静かに彼岸を念じ、此岸を思う一時は貴い。

(真野 竜海)

道すかを生を他自

現代の社会は対立の社会であるといえましょう。小さくは、家庭や職場から、大きくは、国家や世界にいたるまで、考え方のちがいが、利害の関係、権力の座などをめぐって、お互いにしのぎをけずりあっているというのが、現状だからです。

事実、現在の世界の安全は、おもに東と西の勢力がもつ核戦力の均衡、つまり、ふたつの力のつりあいによって保たれているともいうことができます。裏をかえせば、これはいつくずれるかもしれない不安定なものです。

この不安定な姿をよそに、一方では科学と機械の進歩がめざましく、スピードとエネルギーの革命がなされ、距離と時間は、おどろくような早さで、短縮されています。

地球は小さくなったといわれたり「ひとつの世界」などとよばれるようにさえなっているのです。こうしたふたつの逆行は、現代の矛盾であります。人類の悲願は対立や闘争から生まれる不安ではなく、協調と調和による安心の世界です。

自らを生かし、他をも生かす精神、これが現代の社会のもっとも要求するものでありましょう。

ことに、主義、主張、あるいはイデオロギーの相違にもとずく対立は、たがいの人間関係をたちきり、感情と感情がぶつかりあって対立は闘争へと進んでいく傾向がつよいようにおもわれます。

このような、泥沼的状况のなかでは、たがいの異った主義や見解を相手に正しく了解してもらふ努力は水泡に帰し、いわんや事態の解決は、その道をとざされてしまうことが必然です。

仏教では、「解脱への道」をもとめて、創意工夫し、自、他相互が、ともに解脱の身となる、ということが「自由」の意味であるとしています。

自己だけが自由で、他のすべてのものはそうでないというのであれば、自己の自由は存在しないのです。

自由と平等が、同一のものとして相即するところに、仏教のもつ自由、すなわち、解脱があるので。菩薩が誓願をたてて、すべての生ける者たちが、仏とならないならば、自分も、また仏にならない、と誓うことの大切さを、しかと味ってみることが必要でありましょう。

自己の仏となるという利益のなかに、他者の利益の完成が同時的に約束されている点において、自利利他的実践が、仏教徒の基本的実践とされるのであります。

いいかえますと、他に対する深い配慮が、そのまま自己の成長となってくるということでありましよう。

自己を怠ることは、実は他を怠るとなり、自己を愛するものは、他を愛することであるという、在り方を、生活のなかに、ねがいもとめていきたいものです。

「自利よりも利他が優先する」と一般的にいわれますが、「自利がなければ、利他は口先きだけにおわってしまふ」ということも忘れてはならないことです。

その意味からして、自利はすべて利他を内容としてもつものであります。

他の人への配慮がつねになされていく自己の生活であってみれば、当然、そこには、自己をいつもありのままにさらけ出す、「やわらかな心」が伴うはずで。

主客の対立の欧米文化にはぐくまれた、若い世代の人びとに、どうしたら主客の対立を越えた、一如（いちにょ）の世界を体験してもらえるでしょうか。

自分も他人も、もろともに、一つの大きな、み仏のいのちのなかに包まれ、生かされて生きているよろこびを味うことの大切さを、いまほどうしみと感ずることはありません。

彼岸のおとずれは、自他を生かす道をおしえてくれます。

今日彼岸を、菩提の種をまくだかな、

〈特集〉

信仰を育てるために

仏事の心得



=仏事のあり方=

宗教行事
復興時代

(東京・江東区円通寺住職)

後藤真雄

○公害の教えるもの

昨年は全く公害問題で終わった。然も責任のなすり合いと、ほほかむりで、何かすつきりしないままに昭和四十六年の元旦を迎えた。

晴れて澄み切った元旦の青空に飛行機が一機飛んでいた。東京にもこんな青空があったのかとビックリする程澄んでいた。スモッグのない青空は東京でも二日続いた。三日目はもつとも雪となって青空を望む事は無理だ

が、一月も月末の今日となると、暗れてはいるが、寝不足の眼の様に何かドロンとしている。終戦後狭い国土の中で多くの人口を抱え、ひたすらに食糧の増産、経済の成長にと努力を重ね、「ほしがりません、勝つまでは」の忍耐力をそのまま「多少の犠牲は我慢して」と、ひたすらに経済の高度成長発展への道を進んで来た。その結果はたしかに世界中の人の眼を見張らせる様な所となった。

然し、食べるものは汚染され、飲みものは残留毒物があり、野菜はいけない、肉は駄目、牛乳にまでBHCがまざり、水はよこれ、空気もきたないとなつて、漸く人間の存在に気が附いた。私はその事についての善悪正邪をここで論じようと云うのではない。その時、その折に夫々の因により、縁によつて生じた現在である。いづれにもせよ、生きている人間が沢山いる事に氣附いたといふことは、公害が教えてくれた大きな成果である。

○コンピュータ時代の教えるもの

月の石が大阪の万博に飾られ人氣を集めた、科学の進歩はものすごい言葉以外ない。コンピュータが各方面に取り入れられて活躍している。今に赤ん坊が生れると

トタンにコンピュータに記憶させ、種痘から学校、月給から退職金、税金、死亡年月日まで、すぐに答えが出される様になるだろうとの事である。方程式と実験、実証、科学を重んじ過ぎる教育は、理窟っぽい人間ばかりを作り出した。

然し自然の美しさ、人情の機微、食べものの味、と理窟抜きに、素直に感情の世界への逃避の姿が見えはじめた。余りにも科学的な事だけでは何か堪え切れない気持ちのある事をコンピュータ時代は私共に教えてくれた。

○宗教への関心

ある科学の研究所で検査所の増築をする事になった。その地鎮祭を行なう相談をしたら若い所員達の反対で取り止めになった。

私の処へ封筒に入った一つかみの土が届けられた、その所長からである。「地鎮祭は止めたが、何か気が済まないから、コッソリ増築現場の土を一つかみ持つて行くから、お経をあげて置いてくれ」というのである。私はこの気持ちか本当の科学者の態度だと思った。

戦後、安易に幸福と欲望を満たす御利益を目的にいろいろな新しい宗教が出た。然しそれも今日となるとだん

だんと消えて行く。そして眞の宗教に対する関心が強ま
つて来た。

それは生きて行く上に何か大切なものを忘れていた事
に対する厳しい自己反省なのである。

○宗教行事の復興

アポロが月着陸に失敗して、三人の宇宙飛行士が航空
艦上に無事戻った時、全員はアーメンと神に祈った。自
己のなすべき一切をなし尽したもののみが知る宗教的感
情であろう。

宗教行事は追いつめられたものが、何かの形であらわ
さずにおかれたい気持ちから生れて来るものなのであ
る。古くは飢饉、旱天、天災、地変等それからのがれ様
とする切なる願いからいろいろの宗教行事があらわれ
た。今日も前述の様なきびしい自己反省から、再び宗教
行事の新しい復興の氣運が起りつつある事である。

○仏教行事

公害によって生きている人間を見直す事を教えられた
結果は、老人のいる事も思い起され、老人福祉の問題が
大きく取り上げられる様になった。更に祖先への関心
が、核家族の問題と共に深まった。又多少逆輸入的な観

もあるが、外人の坐禪への関心が、若い人達の間にも、き
びしい自己反省への手段として、関心が持たれて来た。
かくして、日本古来からの仏教行事への関心、復興の
氣運が起つて来たのである。

仏教の行事には、信は莊嚴よりといわれて、形を整え
る事によって、自然と信仰を深めて行く型、例えば寺院
の本堂の莊嚴、作法が、或は釈尊鷲峯説法の庭を想起さ
せたり、浄土系の莊嚴の様に、浄土三部經に説かれてい
る、弥陀の浄土の有様のその一分でも表現しようと努力
されたりして、然もその中で、嚴肅に法要が行われ、信
仰を深めて行くと言ふ方法、或は信仰の深まりが何かの
型を表現せずには置けず、一つの型を作りあげたりする
ものとがある。本願の念仏が、声にまで出さずには置け
ない称名の念仏となつた処にこそ宗教と云えるのである。
欣求浄土の信仰が、称名念仏となる処に宗教的な嚴
肅さがある。いづれにしても形から信仰へ、信仰から形
にと、物心一如となつた処が仏教の行事である。形だけ
の処に偶像となり、形式と批難される。頭でわかり、む
ねで承知しただけでは哲学であつて宗教ではない。

掌を合わせる合掌の姿は、敬虔なきわめて自然の姿に

過ぎなかつたろう。然しそれに、「右ほとけ、左衆生とおがむ手の、中にゆかしき、南無の一声」と意味づけた処に宗教的な合掌の姿となるのである。

釈尊の教えは、古い風習の型に意味をつけられた事がうかがわれる。朝起きて、六方を礼する風習に意味をつけられたのが今日伝わっている。六方礼経である。

仏教行事も、古い伝統と、風習の中に育ち、発達して来ているのである。

○仏事、法事、僧事

仏教である以上、必ず敬わねばならぬのは、仏、法、僧の三宝である。従って、仏教行事の中に、仏事、法事、僧事のあるべき事も当然の事である。

釈尊在世の当時は、釈尊やその弟子達に衣食住の供養が行われた。仏に対する供養は敬虔な仏教の行事となった。釈尊滅後も仏に対する香花の供養となり、死者に対しては原始的な時代に、その靈魂の迷い出したり、他の魔障から防ぐために、石を積みかさねる風習である累石の供養が、地水火風空の五大を意味する五輪の塔の供養となり、建碑の供養となり、更に残された者が代って善根を積んで追善共養という行事が行われる様になった。

釈尊の降誕、成道、涅槃等釈尊の記念すべき日に行われる行事は正しく仏事であろう。

経が読誦され、その道理が説かれた事は正に法事であろう。

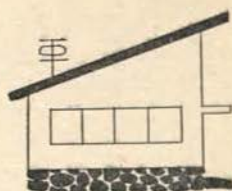
和合の姿をあらわす一切の行事は僧事であろう。

然し厳密な意味で仏事、法事、僧事の区別はつかない。この三つが混然とした処に仏教行事の特長がある。然しその中で忘れてならない要は、法にかなったという事である。これが法要といわれるもとであろう。

仏教の行事も時代と、風習とに従いながら変化もし、進んでも行く。

最近、呉音漢音の經典から、和訳の經典に、洋楽器による音楽法要、東洋風の声明から、西洋風の音楽に、いろいろと仏教行事の形式も生れて来る事であろう。然し、くれぐれも忘れてはならない事は形式化して法要を忘れない事であり、理窟っぽい法のみで、宗教的神秘性の失われない事であろう。

いづれにしても仏事の復興から人間性の大きな忘れものを取り戻す様にしたい事である。



家庭と仏事

— 仏壇のまつり方と心構え —

小俣 昌雄

(東京・品川区行慶寺住職)

「私の家は分家で、まだ家族に不幸がありませんので仏壇ありません」

こういう言葉をよく聞きますが、果して御仏壇とはそういうものなのでしょうか。

先ず御仏壇本来の意味について考えてみましょう。

奈良の法隆寺に『橘夫人念持仏厨子』といわれる飛鳥時代のたいへん古い国宝の御厨子があって、金銅の阿弥陀さまと観音勢至の美しい三尊仏が納められて居ります。

それは有名な光明皇后の母君であられる橘大夫人が日夜『守り仏』として親しく御供養されましたのを、お亡

くなりになったあと、ゆかりの法隆寺に納めるようになったものであります。おそらくこの御厨子の前には香華を捧げる机が置かれ、供物がそなえられたことでしょう。

私たちが御仏壇と申して居りますものの本来の姿はこの御厨子に示されて居りまして、みほとけを納める厨子の中に、御供養のための御道具などを一緒に納めた形が現在の御仏壇だと申せましょう。

従って御仏壇は文字通り、みほとけを安置する主旨のものであって、まつるべきお位牌のある無しによるものではありません。

あなた御自身が信仰のよりどころとして、念持仏をまつるものと御理解下さい。

○ 念持仏としては、私たちは阿弥陀さまの御本願によるおよびかけを頂いて、生きゆくささえとして居るのでありますから、勿論、阿弥陀さまのお姿をおまつり致します。

先亡の方の御位牌だけを納めている場合を往々みうけますが、その先亡の方の冥福を私たちは、みほとけに祈念しているのですから、やはり阿弥陀さまを中心にするように致しましょう。そして先亡の方の御位牌は、みほとけの左右にまつります。私たちもいづれは浄土まつりをして、そのお位牌のお仲間に入れて頂くわけです。

次に、分家の方も家庭を構えたら、やはり御仏壇を設けて、みほとけを安置し、一家そろって心のささえと致しましょう。そして御本家から、御両親亡きあととは、その御位牌を分けて頂いて御供養したいものです。

○ さて御仏壇のまつり方ですが、要は心をこめて御回向を相續することで、具体的には次のことを心得て

頂きましょう。

(一) 御仏壇の方位は問いません。東向が理にかないますが、お宅の間取りに従って、御供養するのにふさわしい処に致しましょう。

(二) 御仏壇を安置する高さは、私たちが正坐して、みほとけを仰ぎ、香を捧げられる高さが望ましいです。御回向はやはり坐って勤めるものですから。

(三) 御仏壇には御道具として、灯明を右、お花は左、香炉を中央にしつらえ、みほとけの前には、毎朝いれたての御茶湯と浄飯を供えます。たとえ一器の茶湯、一碗の浄飯にせよ、お念仏を称えつつ、みほとけをはじめ一切有縁無縁の諸精霊にそなえる心得をもって御供養いたします。

四 お線香は一本を真すぐ捧げます。一という数は所謂始数でありまして、その中に千万の数を含んでいますから功德広大です。

尚、花も茶湯も、その香気を捧げるものですから、花はたとえ一輪でも常に新らしい清浄の香りのものを供えましょう。

折にふれて供え物をいたしますことは申すまでもあり

ません。

みほとけは私たちの『おおみおや』先亡の方も家族のひとり、常に帰依と敬愛の心をもってふれ合い、御供養いたしましょう。

家庭はいわば社会の単位ですが、その家庭そのものに心の安らぎがなかったならば、社会的に如何に成

功したようでも、それはむなしなものといえます。家庭のもつ意味の重さを改めて考えてみましょう。
とかくお互の心を見失い勝ちな世相ではありますが、御仏壇に念持仏を安置して家族みんなが心静かに御供養を積む生活であるならば、みほとけのみちびきを頂いて、お互の心は通い合い、充実した生活がそこから育ちゆくことでありましょう。



法要(法事)のつとめ方

—親族の方(者)が亡くなった時—

千葉寛定

(東京・港区安養院住職)

枕経(まくらぎょう)

まず身内の方、ならびに親戚の方御二人にて菩提寺に行き、亡き人の死亡の通知を致します。住職の都合を聞き枕経・納棺式・通夜・葬儀の日時を決めます。次に近

親者が集り、菩提寺の住職を迎えて読経念仏し回向します。

納棺式(のうかんしき)

右住職により納棺式を行います。近親者により遺骸を

清め、更衣し、経帷子^{けいゐし}をきせ、頭陀袋^{ずだふくろ}・手甲^{てこう}・脚絆^{きゃはん}・草履^{ぞうり}など旅立ちの姿にして棺に納める。また亡き人の遺品も入れる。また生花を入れ棺内を飾ります。

戒名（かいみょう）

人が四苦をはなれて極楽往生をうるためのしるしとして、俗名をあらためて戒名（法名）をさす。戒名には院号・眷号^{けんごう}・居士・大姉・信士・信女・童子・童女・孩子^{こども}・嬰兒^{ゐがい}・嬰女などあり、地方により禪定門・禪定尼・上座などありますが、生前の経歴・信仰・人柄・家柄・菩提寺への尽力などにより授かります。遺族はこれをして、初七日（亡くなった日を入れて七日目）までにおぼえ、追善回向のときにとなえます。

通夜（つや）

近親、知己、友人等関係者集り、亡き人の徳をしのんで菩提寺の住職により、お念仏を中心に読経して回向いたします。

迎葬（むかえそう）

住職あるいは寺僧が迎えに来て、出棺前の経式を行います。

葬儀式（そうぎしき）

葬儀には自宅告別式・菩提寺の本堂内式・葬儀場の露地式・火葬場の三昧式^{さんまいしき}などあります。遺族、親戚が集まりわかれをおしむころのうちに御経をあげ、住職により引導をわたし、往生の門出をおくります。

中陰（ちゅういん）

死亡の日から七日ごとに忌日法要をつとめます。忌とは身をつつしむこと、忌日にはかかさず墓にまいり、親戚、知人等塔婆^{たふば}をたててまごころをあらわす。とりわけ四十九日（満中陰）には、いよいよ極楽に生れる日でありますから、からだの骨にかたどって四十九の餅をお供えます。また白木の位牌^{いはい}は寺におさめて黒塗りの位牌をつくり、住職により開眼供養^{かいげんくやう}してもらい、仏壇におさめ、朝夕お燈明をあげ、香花茶湯^{ちやうちやう}をそなえておまいります。香典返しも大体この日までにおわるようにいたします。

納骨（のうこつ）

中陰のうちよき日をえらんで遺骨を墓におさめます。初七日に納めてもかまいません。

百ケ日

喪をまもって百ケ日には、あらためて法事をつとめ、

次の命日までのくぎりとなります。

年忌（年回法事）

年忌には一周忌、三回忌、以後七・十三・十七・廿三・廿七・卅三・卅七回忌等あり、その命日には遺族、親戚などあつまり、うとくなりがちのおもいをあらたに

山 香 居 安

（大正大学助教授）

祖先是谁にもある

戦後日本の家族構成は随分と変ってしまった。特に家というものの考え方が、封建的な遺制であるということとで打破されてから、若い人々の間では殆んど無くなつて

し、亡き人の記念日としその人の徳をしのび、追善回向に一日をおくり、あわせて自分の修養の糧とします。五十回忌、百回忌をつとめることができるのは家内のさかえ、亡き人のおまもりによることを感謝いたします。

寺 詣 り



墓 詣 り

しまった。従つて家を中心とした祖先という考え方も、随分變つてしまった。

最近必要があつて家庭の宗教事情を調査したのであるが、その時、仏壇が無い家の多いのに驚いた。新婚家庭では殆んど言つていい程、仏壇は無かった。

「私達の家庭では、未だ誰も死んでいませんから。」

これがその答えであつた。よく聞いてみると、已に両親は死んでいた。ただ結婚して二男坊である為、別に家庭を持ったこの家では、仏壇は必要がないというのが、その理由であつた。家が核化したために当然と考えられる理由なのであるが、果してこうした考え方がよいのであるうか。

確かに父母の霊は長男の家で祀っているのであるから、二男以下は別に家庭を持っても、特に祀る必要がないと言えよそれまでである。しかし、長男さえも結婚すれば両親から籍をはずして、独立するのが今日の戸籍制度の立前である。二男の理窟からすれば、何も長男だけで祀る必要もない事になる。これを押しつめて行けば、父母の霊は誰も祀られなくなり、宙に浮いてしまうことになる。そして事実、家というものの考え方の変化は、いつしか祖先の霊をないがしろにしてしまふというのが、此の頃の実状なのである。

一体、個々の人を取ってみても、祖先の無い人がいるであろうか。今日私がこうして生活していられるのも、父母を始め祖先あつての賜である。父母は兄にも弟にも大切な、そして、生み育ててくれた祖先である。財産を

分けるのも均等であるなら、父母の霊を祀るのも均等でなければならぬ。

「何も両親の世話にならなくても、私一人で生活しているのだ。親が勝手に生んだまでだ」

よく若い人はこうした屁理窟をいう。しかし犬や猫であるまいし、まさか道端で生み落したなりにした訳ではあるまい。動物の中で人間ほど、一人前になるまで親の世話になるものはない。こうした親の恩を忘れて、その追善もできぬようでは、万物の霊長とはとても言えまい。

「心の中で感謝しておればよい」

又しても屁理窟である。心にあれば、行動に出さねばならぬ。「態度で示そう」と歌にある通りである。少し話は横道にそれたが、私は家庭を持ったら先づ仏壇を持つべきだと主張したい。そして、両親を始め、その祖先達を祀るべきである。それは家がどんなに核化しても、人の子たるものの当然の行為である。そして、家はこの祖先の仏壇を中心にしてあるべきであり、一日の行動は、祖先の霊の祀りから始まるべきである。こうした家庭は、必ず和合しており、明るく楽しい家をつくつていく。

墓詣りとレジャー

祖先を祀るということは、必然墓詣りをするということになる。仏壇は個々の家で持っても、父母の墓は一つである。仏壇を個々に置いておくということは、何時も父母と共にいるという生活の寄り所である。それは精神的、更には宗教的な生活の中心であるが、墓は父母たちの霊の安らぎの場であり、なきがらと共に静かに永遠に眠りたもうその場である。心に宿る父母たちの影が、墓に詣ることによって現実の実感として感得される場である。

「遠いのでお詣りもできません。」

これも、私が調査したときの多くの人々の答えであった。「気持ちはあるのですが」というのが、その次に出てくる言葉である。こういう人ほど、レジャーには自動車で家族ぐるみ遠出する人である。私は、墳墓は遠いほど又楽しみもあると言いたい。しめっぽい墓詣りなどと考えてはいけない。父母のいる里に、里帰りでもするよ

うな気持ちで墓詣りを兼ねてのレジャーも、何と楽しいことではないか。故郷には旧知の友人や知己がいる。想い出多い山や川もある。子供達に自分の育った世界をみせることも、又大きな教育である。

この頃では、墓も郊外で美しい場所に、全く公園のようにできている。こうなると、墓詣りかピクニックか分らなくなる。私はどう考えてもかまわないと思う。ともかくそこで父母を追憶し、今の自分を報告して、後は楽しく子供達と遊ぶがよい。親もその方を喜んでいるに違いない。

寺は祖先の守り番

墓にもいろいろあろう。寺に墓のある所もあれば、寺と墓と別々な所にあるものもある。私の滋賀県などでは、寺に墓があるが、亡きがらは別の共同墓地に埋める。勿論そこにも墓がある。それ故に、故郷に帰って墓詣りをするときは、先ず寺に寄って本堂に参詣し、寺の墓で供養し、更に共同墓地に参詣する。丁重にすれば、これが最もよいやり方である。しかし、これは場所によっての事であり、その地方地方の習わしもあろう。

ただ寺に墓のある場合でも、寺の本堂は素通りして、墓だけに詣る人がいるが、これは大変な心得違いである。寺は何時も祖先達をお守りいただいているばかりでなく、祖先の霊は、その寺のみ仏と共にいることを忘れてはならない。寺が墓番をしているということは、単に掃除をし、管理をしているという事だけではない。み仏と共に、祖先の霊をお守りしているのである。そのみ仏の前を素通りする事は、人の家に行つて主人に挨拶をしないと同じ事となる。

寺では朝夕のお経の時、必ず壇徒各家先祖代々の霊の追善供養をする事になっている。み仏と共に、祖先の霊をお祀りしているからである。更に「三界万霊」の供養も兼ねてしている。年忌法要の時だけに本堂に詣ることは、余りにも勝手なことといわねばならない。

寺と墓と別々になっている時は、今まで述べたようなわけにはいかない。従つて、盆、暮や、彼岸にはお礼詣りに行くのがよい。この頃、寺ではいろいろな催しものをする。特に浄土宗では御忌ごぎ（法然上人のご命日）施餓鬼じが、お十夜などという法要が行われる。こんな機会にお寺詣りをすることもよい。少くも仏教徒である人は、墓

と共に寺を忘れてはならない。

今までの筋書きでいくと、寺に墓があるから、寺にも詣れるということになるが、それはそれとして、自己の宗教心そのものの問題にも立ち帰ってみなければならぬ。

壇家だから、墓があるからというだけであるなら、一体、自分の宗教心は何処に置いておくのか。祖先を祀るということとは、一つの宗教的行為である。その行為の源泉となる宗教心がここでは問われねばならない。そして少くともそこに曲りなりにも宗教心の存在を認めるとするならば、寺との結びつきを、壇家とか墓を離れて、自己の宗教心において見出し出していかなければならない。より高度な結びつきを見出すとき、われわれは初めて本当に寺と結びついたことになるであらう。

「寺や坊さんは何もしないから、今の仏教は墮落しているのだ」

とよく人はいふ。しかし、そういう人が、自ら進んで、自己の宗教心において求めて行つたことがあるかと問いたい。寺詣り、墓詣りは、決して人の為でなしに、自分のためであることを、もう一度この際確認したいものである。



『浄土開宗』(5)

承安五年(一一七五)の春、法然上人は善導大師の『観経疏』を讀んで、庶民救済の確信をえられ、比叡山をあとに西山の庵室に移られた。こうして長い間の疑問を解決された上人は、はじめて浄土宗を開くことに踏切った。ただ「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えれば、どんな悪人でも平等に救われるという上人の教えは、貴族を主にした従来^{しん}の仏教とはまったく異った易しいものであった。しかも庶民の往生を強調しただけに、戦乱で落着かない当時の人々には救いの神となり、深く人々の心をつかんでいった。



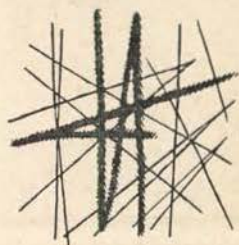
『二祖対面』(6)

やがて法然上人は西山の庵室を出て東山吉水の庵室に移られ、本格的な布教生活に入った。それは、あるとき夢の中に善導大師があらわれ、上人にお念仏の勝れてゐることを説き、念仏の布教を勧められたからであった。いつでも誰でも、どこでも申すことのできるお念仏は、裕福な人も貧しい人も、男でも女でも、老人も子供も、中には他宗の僧侶にまで大きな影響を与え、日を追うごとに吉水の庵室を訪ねるものが多くなっていった。こうして一躍法然上人の名声は全国に知れわたり、当時の社会に光明を与えることになった。

松濤達文 絵
玉山成元 文

ニューデリー(続き)

二十六日。デラックスな食堂で朝食をすませ、九時半市内見物に出かける。一九一一年に新しく建設されたニューデリーは公園のような感じ、道路は広く、走っていても気持がよい。堂々たる国会議事堂! サウスアベニューの左右には議員の宿舎が並んでいて、そのつき当りが大統領の官舎だそうである。何とか街といわれても、私にはおぼえられない。案内される後に従うだけである。ビルラ族の富豪が建てたというヒンズー寺院の前で車を降りる。今までの寺院では階段の下に靴をぬいで上ったが、さすが国際都市だけあって、右側に小さい部屋があつてそこで靴をぬぐ。「外国人用」とか



インドでの

旅日記

=第八回=

佐藤 治子

かれた標示板の所へ私達は靴を預けた。中々立派な寺院ではあるけれど、ぜいをつくしたものではない。建物も朱色の濃淡で色どられ、明るい感じである。外人が目立ってふえてきた。ふとタイコに気がついた。これは全日本仏教会から寄贈されたものだそうである。アメリカの人達であろうか、しきりにカメラを向けている中をくぐりぬけ、もとの階段を下り外へ出る。そこにもカメラを向けている一団の外人がいる。みると寺院の塀の下に、一人目をつぶり座禅を組んでいる人がある。ヨガの行者だということである。このあたりは寄つて来る子供達もあまりいない。

私達の車はシャンタルマンタル天文台へと向う。ジャイプルの王様が二二五年前に建てたものという。幾何学的な形の

色々な建物の中で、ニューとそびえ立つ天望台であろうか、その頂きへかかっている長い階段を、一番若い前田さんはタッタと登って行ってしまった。思わず「気をつけて！」と声を出してしまう。ブラブラと歩く私は歩道近くに咲きみだれるコスモスに目をみはる。デリーの二月末は日本の九月中旬と似た季節なのだろうか。

そのあとガンジの御墓へ行く。中へ入らず墓所をかう棚の上の歩道に立って遙拝する。広い敷地の真中に四角い大きな石がおかれているだけで、実に清潔である。参道のわきの花壇にむらさきの丈の低い草花が咲きみだれている。暑い



サンチの宿の草むらにて

国だけあって、花の色はあざやかで濃い。コスコーのレーニン廟へと何千人かの人達が氷結した広場にしゅくしゅくと並び、その中へ入ってふるえてしまった、あの廟へ参拝をふっと思ひ出すほど、このお墓には人が少ないのだ。天文台で思いがけなくみたコスモスといい、ガンジのお墓のかみくず一つおちていない参道に咲きほこる明るいうらさきの花、見学々々とやや旅の疲れも出てきたこと思う私には、花のもつ自然の姿に目も心もほっと休まる感じである。

博物館へと向う。印度独立の記念の立派な門や、その前のすばらしい大きな噴水を右に眺め博物館で下車。うす暗いロビーで、皆もっているカメラは預けなさいといわれる。事務室へ入り、幾つも並んでいる小さい棚へおくだけである。預り証もくれないし、これではなくなっても文句はいえない。ここは国立博物館。絶対信用できるので、といったげである。館内を一巡。「おどるシバ」は日本の上野博物館のインド展で感激してみたものと同じであろうか。技巧の美しさにやはり心ひかれたものの一つである。

カトープの塔を見学に行かれる一行と分れ、一人ホテルに帰る。日航の人に荷物発送のあと始末の為会わなければならぬし、訪問しなければならぬ人もいたし、カトープは時

間の都合上あきらめることにした。

インドの婦人を訪ねて

内田夫人に御願いしておいた次男の友人丸山さんの口ぐせの「下宿の小母さん」を訪問することになった。丸山さんから預った軽いスエーターをもつて、内田さんが調べておいて下さった番地を目ざし、車は大使館の所在区域とおぼしき方角へと走って行く。丸山さんがあんなになつかしがつていゝる、その小母さんはどんな人だろう。車は立派な家の前で止まる。

奥まった玄関でベルを押すと重いドアがあき下男が現われる。奥様に御会いしたいというと、御留守との事。訪問すると連絡して下さった内田夫人はおかしいと思われたらしい。とにかくこのスエーターを御家の人にも渡してかえらねば。一度ひっこんだ下男の代りに背の高い立派な男の人が出て来られ、中へ何卒と招いて下さる。息子さんらしい。立派な応接間に通されるや、私は来訪の意味を伝えそのスエーターを御母様にとさし出した。まあまあとすめられる椅子にこしをかけたものの、何かスカッとしないう気持である。息子ですと自己紹介されたその人と二三話をしている時、ドアー

が静かに開きねずみ色のサリーをきた品のよい老婦人が入って来られた。「母です」と紹介される。今留守といったのは？ 出先きからかえったという気配もない。うたがいとおどろきの交錯する一瞬であった。居留守をつかったのかしら？ こちらの様子をみたのかしら。もしかすると若い内田夫人をみて若奥さんとまちがえたのかも知れない。とにかく丸山さんときいただけでなつかしみ、椅子をテーブルに近づけ下男のもつて来たお茶お菓子をと、自らすすめてくれる。私にはわかりにくい英語であるけれど、丸山さんの結婚の事などきかれ、非常になつかしうである。おいしそうなお菓子をしきりとすすめて下さるけど、時間もないし、好意も無にできない。私は「失礼とは思いますがこのお菓子ホテルへ頂いて帰ってよろしいかしら？ 日本ではよくお友達の家なので頂く時間のない時、頂いてかえったりしますんですが。夫人の目元は和かくなり「何卒々々こちらでもよく致しますよ。お時間のないのが残念ですね」と私のとつさの初めての訪問客としては失礼な申し出を快く受けて下さったのだ。丸山さんに奥様の様子もお知らせしたいからと、写真をとる事もおねだりすると、広い庭へ案内して、令息も一緒にとらせて下さったのだ。車の所へ戻る時「夕食にお招きしたいがいっならよ

ろしいか」とまで好意をみせて、明朝早くサンチへ立ちますという言葉におどろかれたが、名残りを惜しまれたか、静かな表情ながら「よく来て下さった」とうすすら涙ぐんで、この日本からのお客を見送って下さったのである。「あまりにも階級制度のきびしいインドであんな事いって実はどうなるかと心配し乍ら申出たのよ」というと、内田夫人は「いえいえ、あれでよかったですね。すっかり親しみをもたれた感じでしたよ」と喜んで下さったし、私は心晴ればれとしてホテルへ戻ったのであった。

「私は日本の方は真心をもってつきあえるので好きです。

今住っている方は四代目で、明日、商事の支店長の令嬢と結婚されます。私も招かれています」と話されていたが、こんな立派な家庭に住まえるのも紹介あつての事であらう。「下宿の小母さん」となつかしげに話す下宿とはこんな上流家庭であつたのだ。旅行者としてはめつたに訪問もできないであらう階級の、壁の中にかくれたインドの立派な家庭に、丸山さんのスエーターのおかげと、内田夫人のおかげで客となる事ができたのだ。だんだんと礼儀と報恩も薄らいで行きそうな日本人も、日本人は駄目だといわれないうに気をつけねばならないと思うことしきり。

旅先きのこと故持物にも限度がある。お世話になった方達に御礼に何かと思つても持合わせもない。旅行者とちがいインドのモンsoon(雨季)の不快な氣候にたえて働らいておられる人達に世話になりつ放しは心苦しい。一行の方の中で新しい靴下をもつておられた方や、手のついていない食糧など皆でよせ集めて日航の方々に御礼のおしるしに御渡しした。「こういう品は久々で手にとります」と喜ばれたことは、物資のゆたかな日本では考えられぬことである。

サンチへ

二十七日、四時起床。五時ホテルを出発、空港へ向う。六時四十分インド航空機は離陸、南へと向け飛ぶ。九時、ポバール空港着。ひっそりとした空港である。待つていた車に分乗。東北部は砂糧キビの収穫時であつたが、この辺一帯は帯晶で、もう黄色くなっている。「麦の秋」といって俳句の季節では五月頃の氣候なのだ。古い回教の町を走り抜ける。岩山の間を走り平原を走って行く。この辺りには牛ふんがほしてない。燃料は足りるのであらうか。車は大樹の下で休憩所で停車。私達全部車から降りなければいけないと、シンさんに注意を受けた。何をするものでもない。村の約束事のように

なっているらしく、何はともあれ、一度車から下車すれば文句はいわれぬらしい。右側に墓地があるところをみると、宗教的な見地からこのような習慣になっているのかも知れない。谷をへだてて岩山が見える。昔の「とりで」の遺跡らしい。

再び車へのり、デコボコ道进行。岩山の裾を流れる川べりに村民が洗濯をしている。牛の群をさけて徐行。牧歌的な風景を楽しんでいるうちに、ようやくにしてゲストハウスに到着。二時間近くも走ったであろうか。ポツンとたっているゲストハウスで、案内された部屋に入る。うす暗い部屋！　そつと部屋の中を見廻す。アワ、ヤモリ！　ベタツと壁にくっついている。ヤモリに初めて御出合といった私は、初めギョツとした。けれど何もしないという。中庭をへだて向う側の部屋が見えるから心強く感じはするが、草深い原っぱにポツンと立っているこの宿は蛇でも出そうな気がする。入口の網戸が虫の防波堤になっているのがせめてもの気休めになる。暑い。けれど水の出はチョロチョロだ。おひるを済ませ車にのりゲストハウスを出発。

ストーバ拝観

溶岩のような小石のゴロゴロした道を丘の麓で下車し、小

さい博物館を見学した後、丘へと登って行く。丘の頂上のストーバが見え出した。二千年前にアッシュカ王がつくった一番古いストーバといわれている。円型の基壇の上に半球形の覆鉢があり、その上に四角い玉垣と傘蓋がたっている。大きなストーバをめぐって四つの門をもつランジュン（玉垣）がある。ぐるりと一巡する。砂岩で作られているというが、紀元前一世紀によくこんな彫刻ができたものだ。東門にあのよく写真でみるヤクシニ（女神）が、身体をくねらせて宙に浮くかのような姿の美しさ。像やライオン・キジ等が実によくほられている。丘の上に建てられたストーバの廻りに近づき、あるいははなれ、音もなきサンチの丘にたっている事に感慨無量なものがある。

第一ストーバの近くに僧院の遺跡（バラモンをまつた寺院）がある。少し小型の第三ストーバもこの丘の東北側にある。丘を降りる途中に第二ストーバがあるが、形の美しさ、玉垣の門のすばらしさは何といっても第一のストーバである。ひげを伸ばし放だいの日本人の自称画家が玉垣の門の柱にもたれかかっているのをみただけ。丘の裾に展ける平原を見ながらゴロゴロ道を下って行く私達一行の他は人影もない。



サンチ・第二塔

ようやく降りきった所の広場に、三四十人の小学校の生徒が先生と輪になって遊んでいる所を通りすぎる。珍らしい外国人達と思ったのだろうか、一寸写真をとらせて下さいと申し出た私達に、皆珍らしそうに寄って来た。サンチの遺跡を見学した後休息していたのだろうか。英語の分かる女の先生がニコヤカに皆を集め写真をとらせてくれる。写真機に興味をもったり、手をふったり、私達も一緒に写真をとったり、サンチで思わぬ「親善」の一刻を過ぎた。

下の田舎道の四つ角に茶屋があった。のどがカラカラの私達はコーラなら安心だろうと買う。ストローはついてきたが

蠅が一杯たかっていたストローをみて、こんな事もあるかと用意したのに忘れて来たストローを思い出す。びんの口をよくふいてラッパのみをする。はげたかがいる。近づいてみると殆んど死にそうになっている鶏をつついてゐるのだ。

七時半に夕食をすましベットに入る。ヤモリが入って来ぬように念入りにカヤでベットをかこむ。すごく寒い。昼間の暑さはどこへやら。寒いというより寒気みたい。どうもおかしい。毛布にくるまってゐる。

二十八日、夜半目がさめる。十二時半だったかしら、熱がある。おなかをこわしてもいないのに、用意して来た薬をのむ。もし熱が高く出たらどうしよう！ こんな不便なサンチの宿では、と不安になり出した。

四時半起床。未だ少し熱はある、けれどフラつかないし、どうにか大丈夫と多少元氣が出る。五時過ぎに出発。再びあのデコボコ道を一時間五十分かかって空港へつき朝食をすます。気分はすっかりよくなった。結局暑さにまけたらしい。

ボンベイへ

九時二十五分出発、未だ少し熱があったせいか飛行機の中でねこんでしまった。十二時二十分ボンベイ空港へ到着。



藤吉慈海著

「布施の行者 颯田本真尼」

仏陀の最初の説法である四諦八正道の八正道とは実践を説いたものである。その第一は正見、すなわち己れとものを正しく見ることであった。

大乘仏教では、菩薩が実践すべきものとして六波羅蜜が説かれ、布施波羅蜜はその第一におかれている。布施波羅蜜とは、無限に与えることであり、他者とのかわりを大切にしていることなのである。

大乘仏教で説かれる布施行とはどのようなものか。この問に対して、布施の教理と思想を論ずる資料は仏典の中に豊富に見い出すことができる。

しかし、布施行の真実のあり方を、一人の人間の生涯を通じて、我々の目の前に示してくれたならば、どんなに有難いことであろうか。

これらの願いに対して美事に答えてくれたものが、藤吉慈海著「布施の行者 颯田本真尼」である。

本書は、徳川時代の末期から明治、大正、昭和の四代にわたって生き抜いた一人の尼僧の足跡をたどりながら、真実の布施とは何かをえがいた、啓蒙の書であり、また高僧伝とも云うべきものである。

著者は、知恩院浄土宗学研究所の主任であ

り、最近では浄土教思想の研究をされ、浄土宗義のあり方に種々の鋭い思索を試みられておられる。本書は、著者があとがきの中でいわれるように、「社会的実践の伴った念仏者」という、念仏者の一つのあり方を本真尼の生涯をもって提示したものといえよう。

内容は、略伝、逸話、年譜の三つから構成されている。

略伝は、本真尼の幼少にして出家された様子、さらに明治二十三年、三河地方を襲った大つなみによって、老尼の生涯が決定されてゆく過程、それ以後、難民救済に全国の災害地をかけめぐる老尼の活動が老尼に随行した

新刊紹介

お弟子さんたちの思い出話とともに克明にえがかれている。著者は、従来老尼が単なる慈善事業の先駆者としてのみ理解されてきたことに對して、むしろ生涯を口称念仏の一行に徹し、布施行も念仏弘通の一念をもつてなされたものであるとのべられている。

逸話は、老尼の多くのお弟子さんや大島徹水上人、矢吹慶輝博士等、有縁の人々が語る二十八のエピソードを綴ったものであるが、それらの中で、「笑わぬ人の微笑」「三輪体空」「いつも一所懸命」「施物」「大島徹水上人と本真尼」「譚真老尼」などの中に、本真尼の面目をうかがい知ることができる。

また「婦人記者と本真尼」の中で、婦人記者が晩年の老尼を訪ねるシーンは、老尼の眼前に見るようで、ことによい。少しく長い文章の引用ではあるが紹介させて置く。

「そうかい、それはようおいでだったのう。わしみたいなものをよう訪ねてくれたのう。おほ」

といって、ベシヤンと坐って丁寧におじぎをされました。私も驚いて挨拶しました。その丈の低い、木綿の風色の衣をきた老尼こそ、私の会いたい会いたいと願っていた、颯田本真尼でありました。

「これはのう、まことにつまらないものだが、まあ志だけ受けてくんなんし」

そういって、私の前に出されたのは、大きい袋に一ぱいあるお菓子と、半紙にのせた五十銭銀貨二枚でありました。私は再び狼狽しました。するとお弟子の尼さんが、

「ほんに少しでございませうが、ぜひお受け下さいまし」

と熱心にいわれますので、私は素直にそれを受けなければなりませんでした。

「ありがとうございます」……

「少しでのう、南無阿弥陀仏」

といいながら、本真尼は満足そうに笑いました。

本書のはじめには、著者の恩師である久松

真一博士の一文がよせられているが、逸話の中にも、博士の老尼の布施を評することばとして、「お慈悲を喜び、仏の光にいだかれて生きる仏教信者は多いが、自ら慈悲を行じるところまでゆきつく仏教者は極めてまれである。仏教に説く慈悲は、そこまで積極性をもつてこないと仏教も本当に高い意味の宗教ということができない」とのべられているのは、恐らくキリスト教との比較において語られたものかと思われるが、仏教の慈悲が觀念の世界に留まりやすい危険性をもっているのを、老尼が打破していると論ずる博士の見解は注目されるべきである。

はしがきの中で、著者は「小著を読みかえすとき、今でも私の心はおどる。老尼の呼び声が私の心耳をうつからであらうか」と記されているが、一人の女性念仏者のダイナミックな生き方を示した本書の一読を強くおすすめしたい。

(大南電昇)



このまま放っておいたら未亡人は、故人の後を追ってしまふそうだという。小生の知人中にも夫に先立たれてすっかり力を落し、一年も経たぬうちに命脈尽きた妻君があるかと思えば、また妻の死後三カ月目に自殺した夫君もある。そこでこの程列席した葬儀の遺族に、小生は次の如きお悔やみを述べた。

則ち、新仏の魂は今あなた方の体の中に、乗り移っていられる様に思えてならぬ。そこで今後は、故人を背負っていられる自身の命を大切にして、二人分の長生きをして欲しい。そして小さな珠数でできた指環を進呈し、この珠数や仏壇、御香、蓮の花等を葬儀にだけ結びつけて考えている人もある様だが、決してその様なものでは

捧 げ る 心

(山口県防府市在住)

合 田 微 雪

ない。ついでに色紙に拙い文字をしたためた。「惜しけれど涙拭いて仰がなむ君いま浄土蓮のうてなぞ」次に、江湖の転ばぬ先の御杖にもと、恥を忍んで貧しい懺悔話を申し上げる。

死病の老母にと来て貰った付添婦は、いい年齢をして朝起きるとまづ己が化粧を始めた。(戦前死亡の父には看護婦が得られたが、人手不足の昨今は到底不可能)そこで毎朝病人の食事も、母の離れ家の円窓をくぐり抜けて持込み、まだ眠っている隣室の付添婦に気兼ねしながら、食べさせた。そして殆ど付ききり、殊に最後の十数日は着のみ着のまま、下着の取替えも病室で済ませ、朝顔もあまり洗はなかった。というのは、注意していても

臨終の際運悪く居合わさず、席を外していたという例を、これ迄幾度も聞かされて来たから。

いよいよ引取る時も、まことに物静かであった為、その手を握り脈をとっていながら、肉親の最負目でいつそれが止ったか、解らなかつた。やつと気付いた瞬間呆然となり、やがて我にかえりどっと込みあげてきたのは「よく私の為に今日の日まで、生きて下さいました」の感謝心のみだつた。

もともと小生は月足らずしてこの世に生を得た。それも悲しい母の、さだめによるもの。あらゆる苦難を忍び養育に専念してくれた彼女は、この身にとり絶対的な存在であつた。が、次第に老い衰えてくると逆に我手のように思えてきだし、更に病床に伏してからは、手中の珠玉となつた。

瞑目した夜、この母方の一従姉がたつてと申出て、小生に代つて通夜をしてくれた。この際十分の休養をとらせねば新仏に申訳がない、というのだ。そういえば父の時にも父方の従兄から、同様の情をかけられた。何という身の果報、心中深く合掌。

一夜明くれば、思いがけない人にまで泣いて悔やみを

いわれ、また新たな涙止めもあえず、遂に顔面がただれ、葬儀には目だけを残した、繻帯だらけの顔で臨んだ。

然し、今も心残りの事が一つある。夫婦交代で母の病床に侍つていたが、引退っている間も氣に懸り眠れず、為に他人の付添婦でない遠縁の者の応援を仰いだ。ところがその手前照れていまわの利那「いづれ私も後から行きます。極楽浄土で待つていて下さい」その一言がどうしてもいえなかつた。

氣持は常々から通じ合い、今更その必要なしとはいへ、薄れた意識の殆どはあの世で合掌していても、残りの僅かはまだ俗世のもの。他人がいた為それが言えなかつたというのは、勇氣がないのではない。誠意が不足していたのだ。「男だ。めめしい事は出来ぬ」と弁解する心根こそめめしく、卑怯というべきである。

「人間生れる時は一人、死ぬる時も一人」だそうだ。無論自分が死ぬる時は、その覚悟でいる。否、死後も霊となつて現世を見てい度い氣もする。然し、誕生時は一人ではない。むしろ自身は意識せず、母だけの必死の力で生れた。その母の死に際し「どうぞお一人で」等という氣に、如何してなれよう。

自ら申すのも恐縮だが、若い時から母は幾度となく頻死の人の手を執り合掌せしめ、有難い御来迎を語り、成仏を見届けた。それだけではない。その前々から引取って介抱し、中には仇した人間にも恩で返し、優しく死水を取り捧げた事もある。(その一部は曾て本誌にも紹介済)

幸薄い母は、真珠指環を愛し、時々取出しては眺めていた。(真珠は傷ついたり貝の涙の結晶だという) そして日常は自分の名に因んだ紫石の指環をしていて、随分磨り傷んでいたが、離さなかった。それが数珠代りであった事をずっと後になって知り、それから小生も母の真似事に努める様になった。老人とみれば己が親と思ひ尽し、病人の見舞や看護にも、家内の者に対するのと同じ心で接した。その母にして、彼女が重態となりはじめてからは、某父子医師に鎮痛用の連続注射をして貰っていたが、一日若い方の医師の前で母が「抱いて」と洩らした。が「しない方がいいでしょう」といわれた医師を送って付添人も去り二人きりになるや、とても抱く事不可能な重病人ながら、確と抱いたと同じ効果の姿勢をとった。そして……。

然し、如何に考えてみても母の信仰や、してくれていた愛情に比し、自分の修養、母への報恩行為など、遠く及ぶべくもない。懺悔に堪えぬ胸中を僅かに温めてくれるのは、母が常に小生の妻の(殊に病床に伏してから)肉親も及ばぬ献身振りを感謝し続けていた事、その想出だけである。そして人間、「信仰態度と誠意を示す事に、更に勇氣を持たねばならぬ」と我とわが胸に言い聴かせた。

蛇足。小生は男の身で、粗末な銀製の指環をしていく。(銀はプラチナ等と違い、絶えず心して磨いていないとじき錆びる) 実は数珠の代りで、数珠では何かと不便でポケットに忍ばせる。と凡夫はつい忘れ勝ち。で、数珠のほかにこれを見える所である指につけていて、嬉しい時悲しい時、また心中咎められる思いの生じた時、見下して反省し、強く生きるべく努めている。事実これを凝視していると、人の目の前でも口に出さずとも心の中で十分、お念仏を称えることが可能である。



道

産寧坂の道

高橋良和

京都の人が古い京都のことをすっかり忘れてしまっている。しきたりならまだしも、地名でも最近では、京都古来の呼び方をしない人が多くなってきた。

洛東清水寺に詣でる道に産寧坂（さんねいざか）という名の坂がある。この附近には、土産ものの店があり、骨董屋、それに赤い毛せんを敷いた茶店もあって、京都の情緒も豊かなところである。

その産寧坂を、このごろでは三年坂と呼んでいる人が多い。産寧坂といわれるのは、清水寺の楼門の前にあった泰産寺が安産の寺であったところから、お産が安産であるようにというこゝとで、この名をつけたのであるから、あきらかに産寧である。それが知らぬ間に、三年坂となり、そのつづきの二寧坂も二年坂と呼ばれるようになったのである。

この二つの坂をのぼると、楼門があり、古い観音堂がある。

清水寺は法相宗の数少ない名刹の一つで、今は北法相宗という一宗を創建している。この寺の貫主は、よく世間に知られている大西良慶さんである。



この寺の観音さまの御利益は、謡曲の田村、それに熊野（ゆや）によって、靈験のあらたかであることが知らされているが、京都にきて、清水寺の観音さまに参詣し、その舞台に出て、京都の景色を見ないものはほとんどないといっても過言ではない。

その観音堂を拝して奥院の手前に行くと、そこに阿弥堂がある。珍らしいことで、法相宗の寺に阿弥陀堂があるのである。

というのも、この阿弥陀堂は、その昔滝山寺と呼ばれた寺であつたのが、後にその本堂とみられる阿弥陀堂だけが残つたとみるべきである。

この外にお堂としては、経堂、田村堂、釈迦堂、奥の院それに三重塔などがある。

であるから滝山寺は今は無く阿弥陀堂のみということなのである。この阿弥陀堂で法然上人は、念仏による教化をされたところなのである。

四十八巻伝の第十三のところ

上人清水寺にして、説戒のついでに、罪惡の凡夫なれども、本願をたのみに念仏すれば、往生うたがいなきむね、ねんごろにすすめたまいければ、寺家の大勸進沙弥印藏ふかく本願を信じ、ひとえに念仏に帰す。これによりて文治四年五月十五日、滝山寺を道場として、不断常行念仏三昧をはじめしに、能信といえる僧、香炉をとって白開行道するに……とある。そしてその念仏の勸請には数しらざる結縁があつたということである。

「その行いまに退転なし、阿弥陀堂の常行念仏と号するなり」とつたえている。

その阿弥陀堂が、滝山寺である。文治四年というと、法然上人五十六歳のときである。

この四十八巻伝にある記録からすると、上人清水寺で説戒のついでにとある。であるから法然上人がこの地で説法されたことはたしかである。



数少ない法然上人説法のところといえるだろう。

またついでにということで、凡夫が極楽に生れるについての念仏が、如何に重要なものであるかを説かれているので、ひよっとすると、大衆説法の第一声がここであつたかもしれない。この場所です数多くの帰依者に接して、上人自らが説法されたのであるから念仏勧請の由緒ある土地といわれることも当然である。

その証縁に、のちに後柏原天皇から「日本最初常行念仏道場」という勅額をいただいているのが、今もこのお堂ののき先にかかげられている。

単なる念仏道場でなく、常行念仏道場なのである。常に念仏を修した道場であるから、これこそ法然上人の勧められる念仏の心にぴったりと合つた道場といえるだろう。

この阿弥陀堂のなかに入つて、お堂の内部を拝すると、その中央に丈余の阿弥陀如来が安置され、その両横に観音、勢至がまつられている。

そして、その向つて右に、法然上人の御木像が安置されているのは、この常行念仏道場の念仏修行の姿を見守るようである。

然し悲しいかな、今はこのお堂で念仏の声を聞くことが出来ない。

後柏原天皇の日を最初のあの勅額の御ことはが、どこかにとんでいったような気がしてならないのである。

最近上人の二十五霊場の葉の刊行が計画されているが、実際足で歩いた、霊場記であつて欲しいと思うし、上人の歩かれたあとを、もう一度自分の足で歩いて書いて欲しいと思う。

吉水の庵から、歩いてこの清水寺に説法に出かけられる法然上人のお姿を、あの産寧坂でおみうけしたような錯覚をおぼえるほど、この阿弥陀堂の説戒のお姿を心に浮かべるのである。

人は誰しも理想を持ち、ひたすら追いかける。それが夢のように遠いものであらうと……。

理想と現実がマッチしたものであれば満足する。しかし、納得できなければ、その理想に少しでも近づこうとする。理想と現実との不合理は、時には人を落胆させ、失望させてしまふ。いや現実はどうあれ、いうことを聞かない。だから得てして、理想を現実として作りあげてしまうことさもある。これが世の中なのかもしれない……。

浄土宗開祖、法然上人の御影を一度でも拝した人は、その豊満な姿の中にも高貴な気高さを感じるであらう。それほど法然上人の御影は温和で、円満相好な姿が多い。鎌倉時代に念仏を民衆に大いに弘め、浄土宗を開宗したことを思えば、誰しも納得するであらうし、また満足する。

ところで壬生寺は宮城県加美郡にある曹洞宗の寺院である。ここに鎌倉中期以降の法然上人自作といわれる御影像がある。やや猫背で伏目がちに端座し、両手に数珠を廻らし念仏を称える姿を表わした、等身大の木彫像である。ところが、後世一般に見られるなじみ深い御姿と全く異にしている。寺伝によると、法然上人の弟子金光房が、この尊像を貰い受け、東国に持ち帰り壬生寺を開き安置したといわれる。東

国北方における念仏の隆盛は、この金光房の弘通によるところ大である。宗派を超越したところの念仏信仰は東国地方の特有でもあらうが、法然上人の思慕からでもあらう。

それにしても、壬生寺や当麻寺にみられる像は法然上人の強い性格を表わしている。しかし、この姿こそ真の姿ではなからうか。というのも、出家より苦難の生活が始まる。そして数々の念仏迫害の上に流罪という一生であった。こうした法然上人のたどってきた苦難の道であった。それを思えば性格の強い、精神力の頑強な持ち主でなければ、なかなか世の中を切りぬけられるものではない。従って、そうした試練が厳しい性格と精神力の持ち主として如実にこの像に彫まれたとしても、けっしておかしくはない。また当然ともいえる。

しかし後世になって、偉大な法然上人を思慕する心が、民衆をして、また宗内においては、理想に近い姿に作り直されていったのではなからうか。民衆の心の中に浸透する法然上人は、性格の強い精神力の強さの中にも、温和で円満であり、親しみ安い尊像であった。そして、それは、漸次描き変えられ、ついに民衆が理想としていた法然上人と一致した。いわゆる理想を現実にしたのである。民衆の力が……。

法然上人の御影像をたずねて



伝法然上人自作の御影像

宮城県往生寺所蔵

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十六年二月二十五日印刷

昭和四十六年三月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋二ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和四十六年二月二十五日印刷 昭和四十六年三月一日発行
(毎月一回一日発行)

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

碩学
の名著 『浄土宗読本』 覆刻版

価 1000 円 ㊦ 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

竹 中 信 常 著

新刊 『選択集に聞く』 B5判・308頁
価1000円・㊦150円

発行所 教育新潮社

著者長年の選択本願念仏集の研究・既刊の解説書の集大成、選択集を現代に贈る平易な文面、浄土宗徒必携の好書。

浄土トラクト

新刊 『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

新書判 本文16頁 価 50 円 百部以上 45 円 ㊦ 25 円

“春彼岸会の施本に好適” 本会発行の

『ひ が ん 会』 春 期 号

新書判・表紙共12頁・価 15 円 百部以上 12 円 (送料実費)

各々御用のむきは早目に本会へ申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-1-16

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番

浄
土

第三十七巻

第三号

定価金九十円
(送料六円)